

「米百俵の精神」のほんとうの意味

八 木 三 男

小泉首相は所信表明演説をつぎの言葉でしめくつた。「今の痛みに耐えて明日を良くしようという『米百俵の精神』こそ、改革を進めようとする今日の我々に必要ではないでしょうか」。

「米百俵」は首相の説明のとおり、戊辰戦争で討幕軍に抵抗して焦土と化した長岡藩に三根山藩からおくられた米百俵を、ときの大参事(旧家老職)小林病翁虎三郎が三度の飯にも事欠く藩士らの反対をおしきって、明治三年に開学した人材育成のための「国漢学校」設立の費用にあてた。以来長岡から幾多の俊秀が輩出したという話である。山本有三の戯曲にもなつて有名になった。

山本の戯曲『米・百俵』は小林虎三郎に関する詳細な研究とあわせて一本にもとめられ、一九四三(昭和一八)年に新潮社から出版され、同時に井上正夫演劇

道場によって、築地の東京劇場で上演された。戯曲は初版五万部といわれ、演劇も多くの観客に感動をあたえたが、軍部によって「反戦戯曲」として弾圧されて本は絶版、自主回収せられたといわれる。

北越戊辰戦争で討幕軍にはげしく抵抗したのは有名な軍事総督河井継之助であり、その時点で来るべき時代を予見して参戦に反対して平和を主張してやまなかったのが小林虎三郎だった。国漢学校設立にはまず平和でなければできない事業という意味と次代を予見するという意味がある。

国漢学校といっても、洋学局や医学局もあり、あたらしい時代に即応しようとしており、洋学校は後に長岡中学(長岡高校、私の出身校)へ、医学局は長岡病院へ発展した。しかし、なかでも重要なのは、この学校が医学局も含めて農民や町人の子弟にも開かれたこ

とである。入学資格は四書五經の素読を終わったものという制限はあったものの、町代や庄屋の印があれば簡単に入学できたものようだ。月謝は二朱。これは明らかに小林の年来の主張によるものである。明治五年の彼の友人への手紙にはつぎのようにある。「とかく諸旧藩の風習では、平民教育に心を用いず、士族のみに教育費用をかけ、凡才のもとに俊秀に教えるべき学科を授けるようなことがおこる」「これは畢竟地方官が教育事務に疎いからで、慨嘆少なからず」

もうひとつ重要なものに、明治八年に小林の弟雄七郎が仲立ちして建てた「財団法人長岡社」がある。これは学問ができて学校にはいれない子どもに学資を補助する機関である。これも小林の考えだといわれている。山本五十六の中学校時代の学資もここからでた。以上のように、「米百俵の精神」には「今の痛みに耐えて明日を良くしようという」高邁な精神のほかに、百姓・町人に対する教育の機会均等やそれを保障するための経済的支援の機能が準備されたのであって、痛みを強いる「高邁な精神」だけですぐれた人材が育成されたのではない。

小泉首相は所信表明演説のなかで社会保障の柱であ

る年金・医療・介護には「自助と自律」を強調して国の責任を回避し、「構造改革」で非効率部門の淘汰を宣言して、中小企業をおびやかし、大量の失業を予測させる。これでは「改革」を名目にして国民に痛みを強いるだけのようにみえる。「痛みに耐える」ことだけをいって、長期大不況のなかで十二分に疲弊している国民に対して展望を具体的にしめすのであれば、「米百俵の精神」とはいえないし、政治とすらいえないだろう。

さらに、小泉首相はアメリカの世界戦略と連動する集団的自衛権や首相公選制を強調することによって、憲法「改正」を視野におさめ、靖国参拝に極度にこだわっている。これらは小林虎三郎の平和主義を体現した「米百俵の精神」とは相容れないものである。また、自衛権を厳しく制限した国連憲章にもとどり、二十一世紀を見とおす先見性と国際性をいちじるしく欠いている。

〈参考〉

山本有三『米百俵 小林虎三郎の思想』、
長岡市刊、一九七五年

（やぎ みつお・いがた具民教育研究所所長）